



外観を白く塗った第一工場

オオシマ自工(株)  
(山口県柳井市南浜)

# “夢を運ぶ車づくり”を 目指し生産体制の充実 オンリーワンの ボデー開発企業に発展



秋元徹郎社長

## ■ユーザーの発想から開発された 電動式ホロウイング

オオシマ自工は昭和59年9月に大島貨物(株)の子会社として、電動式ホロウイングの製造に始まる。筆者が最初に秋元社長とお会いしたのは創業間もなくなので、ほぼ30年前になる。親しくしていた日野自動車の特装担当者から、「山口に面白い側面開放車を開発した車体メーカーがある」と紹介を受けたのであるが、早朝、筆者の自宅に電話があり「いま、晴海展示会場の入り口にいる。是非、電動式ホロウイングを見て欲しい。」という依頼。

当時はまだマイカーが無かったので一番電車とタクシーを乗り継いで晴海に駆けつけると、外観はホロ車に見える中型トラックが1台停まっていた。運転席から降りて来られた秋元社長が、山口から夜通し走り続けて早朝東京に到

着したことを説明される。当時、秋元社長は大島貨物の専務を兼任しておられたので、トラックの運転は慣れていたかも知れないが、約1000キロ近い道りを電動式ホロウイング宣伝の為に走破して来られた熱意には頭が下がったものである。

当時のトラックは、平ボデーにシート掛けから、幌掛けやアルミドライバンに移行する時代で、荷台を密閉することで輸送品質は向上するものの、積載物の荷役作業が課題となり、側方荷役を可能とするワンタッチ幌やウイングボデーが開発された時代でもある。

オオシマ自工の電動式ホロウイングは、幌車の側面を折りたたみながら上方に開放するもので、側方にゆとりの無い狭い場所でも開閉できるところが特長である。

この電動式ホロウイングは、一定の評価を得たのであるが、ルーフ(天井)が固定であるため

に、貨物を積載した際に荷室上部にデッドスペースが出来るし、背高の貨物も積載しにくい難点があった。そこで、この電動式ホロウイングをベースに開発したのが天井昇降装置(800~900mm)による電動式リフトウイングである。センタービームのない電動式ホロウイングは荷室内高が2760mm確保できるので、家具など背高貨物の輸送に大活躍することになる。

電動式ホロウイングに始まるオオシマ自工の開発製品は、その後、水平脱着ボデー、空ドラム缶運搬車、電動式フルオープン車(自動シート掛け装置)など多くのヒット商品へと繋がることになる。

最新鋭の生産体制

本誌が第1回目のトラックショーを開催したのは1984年なので、オオシマ自工が初期の電動式ホロウイングを開発した時期とほぼ同じである。トラック運送事業者を対象にしたト

ラックショーは、同社が開発する各種の物流車両を展示する場としても最適で、当初から出展参加頂いていたが、暫くして「福祉移動拡幅理美容車を開発(1998年)した。」という連絡を頂いた。この車両は、高齢者などの福祉施設に向いて理美容を行うもので、物流車両とは全く異なる分野の商品である。運送事業の大島貨物の子会社としてスタートしたオオシマ自工は、当初は物流車両の開発を目的としていたが、この時点で同社は大きく路線変更し、それが今日の事業発展へと繋がることになる。

前日、電車を乗り間違えてオオシマ自工のある柳井到着が大幅に遅れてしまったので、取材は翌朝。午前6時前、秋元社長に迎えに来て頂いて会社に向かう。オオシマ自工はJR山陽本線の柳井駅からやや南に下がった位置にあるが、工場建屋の外観が真っ白に塗られている。この塗料は断熱効果に優れて、真夏でも室内温度が数度も違うので、作業環境が改善されると同時に空調代が節約出来るという。工場の中は現場事務所を整えると同時に、最新鋭の工作機

械(トルンプ製レーザー加工機)も増設して、品質と生産能力の向上を図っている。

工場の中には生産途中の移動拡幅車が数台並んでおり、完成間近の一台を秋元社長が実際に動かして説明して下さる。

まず、リモコンで後部の扉を跳ね上げるとその内側に折りたたんだ階段が格納されており自動的に降りてくる。同時に折りたたんだ階段のステップもリンク機構によって開かれる。そして、車体の下には、自動で伸縮する支持脚(アウトリガ)が取り付けられており、ボタン操作で下がってくる。次に、拡幅機構を操作すると二重構造になっている内側の室内が側方にせり出して室内スペース約1.5倍に広がる。荷室が側方にせり出しても、車体下は支持脚で支えられているので床は水平を保つ事が出来るのである。また、同社の拡幅車で特長的なのは、拡幅部分を操作すると二重に折りたたまれた室内の床部分も連動して開くようになっていることだ。このように、室内を広くすることで、車両の空間を活用した各種業務は大幅に向上させることが出来る。

同社では、顧客のニーズに合わせて各種の車両を開発しているが、その為には様々な形状の部品が必要で、最近導入したTRUMPFレーザー加工機はデータをを入力するだけで短時間で製作できる。

この第一工場の二階部分が本社事務所であるが、最近では需要が増大して生産が追いつかない状況が続いており、中庭を挟んだ第二工場もフル稼

働となっている。

◎第一工場

敷地約= 4,000㎡ (1,200坪)

工場建坪= 1,800㎡ (545坪)

◎第二工場

敷地約= 6,600㎡ (2,000坪)

工場建坪= 3,300㎡ (1,000坪)

◎合計総面積

土地= 10,600㎡ (3,200坪)

建物= 5,100㎡ (1,545坪)



第一工場の内部



各種の工作機械で部品を製造



架装車両が並ぶ第一工場



ドイツのトルンプ製最新鋭レーザー加工機導入

の夢が果てることはありません。オオシマ自工は「夢を運ぶ車づくり」をしています。」と書かれている。

また会社案内の最初のところでは、「オンリーワンのボデー開発で、移動店舗・物流業界に貢献します。」と題して、秋元社長が次のように述べている。「他社が手がけていない高品質なモノづくりと技術開発」を企業理念に、四半世紀にわたり、輸送用ト



第二工場外観(工場の広さは第一工場の約2倍)

■独自の開発力で新分野を開拓

同社のホームページを開くと、最初に「夢を運ぶ車づくり」と題して「お店がまるごと来てくれたらいいな。もっとたくさん安全に運べないだろうか。どんなに便利な社会になっても人

ラックボデー及び特装ボデーの開発をしてきました。ユーザー様からのご要望を実現するため、ユーザー様と共に調査・研究を重ね、当社技術を結集して作り上げた各種車両。これら自社開発商品によって、オンリーワンの地位獲得を目指しています。これからも、より複雑・多様化するニーズに応え、研究開発型企業としてさまざまな業界への貢献を果たす所存です。」

約30年前、運送事業を営む傍らで着想した荷役作業の効率化を目的にした電動式ホロウイングの開発は、時代と共にバリエーションを広げ、「オンリーワンのボデー開発企業」に発展している。

しかし、ここに至る道のりは決して平坦では無くて、お目にかかるたび秋元社長は「この先車体メーカーはどうなるのでしょうか」と不安を口にしておられたものである。現実には、全国に数多くあった車体メーカーも幾多の動乱の中で半減している。

既に創業100年を超えるメーカーが存在する車体業界で、オオシマ自工の歴史は決して古いとは言えず、しかも同業他社がどんどん淘汰される中で業績を伸ばして来たことは目を見張るものがある。その最も大きな要因となったのは、物流車両だけに拘るのではなく、車両の持つ「荷室空間」を活用した用途開発に積極的にチャレンジした事にある。

自動車の歴史は、1769年にフランスのニコラ・ジョセフ・キュニョーが発明した蒸気自動車に始まると伝えられているので、僅か250年に満たない。とくに日本のモータリゼーションは戦後であるから産業として本格化したのは半世紀そこそこである。

自動車産業の特長的なところは「量産化」によってコストを下げ、大衆化を図ったことにある。これが人々の暮らしに浸透し、社会を大きく変えたことは間違いない。しかし、トラックをベースとする商用車は用途が多様多岐なので、「量産化」が難しい分野である。

そこで、オオシマ自工が目指したのが「オンリーワンのボデー開発企業」である。世の中に1台しかなくても、その車両が存在する価値があれば、コストを掛けて開発しても評価される。この発想は自動車業界の「量産化」とは真逆であるが、車体産業では希少価値となったのである。

ただ、中小企業がこの「オンリーワンのボデー開発」を貫く為には、資本力に加えて人材



拡幅すると床が折たたみ式となりバリアフリーとなる



荷台下には拡幅の際に車両を安定させる支持脚が取り付けられている

新シリーズ◇  
時代を語る 車体人 6

の壁がある。つまり、ユーザーが希望する機能を開発するエンジニアが必要となる。

秋元社長と懇談すると必ず口にするのが「藤谷(誠)専務が居なかったら今日のオオシマ自工はなかった。」の言葉である。

物づくりにはアイデアが必要である。そのアイデアは顧客の希望も含めて秋元社長が考え、それを藤谷専務がカタチにする。それらをつくる事の出来る藤谷専務には、独創的な技術開発能力があり、この点では天才的である。

これまでの同社の商品開発の技術は殆ど藤谷専務が考案したもので、多品種(多くのバリエーション)少量生産に徹して数多くの特許を取得している。

同社では、産業車両の業界で経験を積んだ秋元社長のご子息、秋元大介氏が経営に参画して、次代の準備に入っているが、“オンリーワンのボデー開発企業”は連綿として継続されるに違いない。

(秋林路)



後部扉を跳ね上げて格納されていたステップをセットするところ



ステップもリンク機構で自動的に開閉する



荷室内高 2760mmの電動リフトウイング車



空ドラム缶運搬車



エアサスを使用する自動水平脱着ボデー



軽四輪移動販売車



取り外した状態



拡幅式移動理美容車(3トン車タイプ)

